

【ジュネーブ海軍軍縮会議】

早いもので今年も折り返し地点の頃となりました。

6月15日から17日には、フランス東部エビアンにてG7サミット（主要国首脳会議）が開催されました。2023（令和5）年5月に広島で開催されたG7サミットも記憶に新しいです。

今月の“イッピン”は、實が国際軍縮会議日本全権として出席した「ジュネーブ海軍軍縮会議」についてご紹介したいと思います。

ジュネーブ海軍軍縮会議は、1927（昭和2）年6月20日スイス・ジュネーブにて補助艦（巡洋艦や潜水艦）の制限について話し合う場として開催されました。

ワシントン軍縮会議は、1921（大正10）年7月アメリカ大統領ハーディング氏によって主唱され、11月12日からワシントンで開催されました。第1次世界大戦後、この会議では各国が保有できる主力艦及び航空母艦の総トン数が相対比率的に定められました。

ワシントン軍縮会議からおよそ6年後の1927（昭和2）年2月、アメリカ大統領クーリッジ氏は第2次軍縮会議招請の案内を日英仏伊の各国に発しました。しかし仏伊両国は参加を拒否。ワシントン軍縮会議の5国会議から3国会議へ縮小となりました。

若槻礼次郎首相はジュネーブ海軍軍縮会議全権人選に着手し實に白羽の矢を立てます。朝鮮総督として赴任中である實は筋違いだと一旦は断りますが、首相のほかにも要職らからの勧誘を受けます。實は前回のワシントン軍縮会議に世界秩序と恒久平和の夢を託した当時の原敬首相、そして全権として参加し實の盟友でもある加藤友三郎海相の意志を受け継ぐ必要性を感じ、要請を受諾しました。

ついに實は春子とともにジュネーブへ。この時70歳という年齢であった實にとって、長旅による健康不安も抱えた中でしたが、英語に堪能であり外国人とも多く親しんできた春子の存在は良きパートナーとして無二の適任者でした。

晩餐会では夫妻は得意の語学力で各国の全権らと交流を深め、国際親善に努めます。会議においては、駆逐艦、潜水艦については歩み寄りがみられましたが、巡洋艦については英米の主張が対立し、實は両国の調整役として妥協案を提示し続けました。残念ながら共通の取り決めは妥結ならず。しかし實の主張した「国利民福の点から、平和を維持しつつ将来ますます進展するために必要なる軍備の本義」は次元の高い襟度を世界に示し、日本という国の国際的な存在感を表す結果となりました。



ジュネーブへ向かう船上での實と春子



斎藤全権一行